

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	病理地學概論：論説
Author(s)	太田，重雄
Citation	龍南會雜誌， 8 1： 1 5 - 2 2
Issue date	1900-09-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4989
Right	

然るに我れ艶麗の筆、利巧の舌に習はず、而のみならず、思想動もすれば錯雜轉倒、前後相重複せんとぞ、議論往々片重片輕、迂論成立せざらんとす。稿を脱ぎて一度び讀過すれば、冷汗實に万斛、此を絢麗富鮮の文苑に挿まば、或は枯稿脱落、見るに忍びざらん、茲に至りて、幾度か筆を抛つ、然れども、復た想ふ、凡そ世に歡迎せらるゝもの、何事に依らず、結構壯麗、意匠歴々たるものゝみに限らざるが如し、田舎風景の愛せらるゝは、其無邪氣にまて飾りなきが爲めに非ずや、能狂言の世に捨てられざる、寧ろ其阿呆の至れる所以に非ずして何ぞ、乾燥の筆、阿呆の舌も亦聊か世に捨てられざらんかな、而も我れ別に思ふ所あり、世の取捨は暫く問はずして可なりと、自ら慰め自ら激まし、再び筆を執るもこれ亦阿呆の致す所乎、呵々、

(未完)

病理地學概論

太田 重雄

病理地學は、讀んで字の如く、病理的方面より研究する、地理學の謂にまて、苟も病症に影響を及し、是と關係を有する地理學上の事實は、悉皆探究の範圍内にあり。

吾人は此の論歩を進むる前に當り、暫らく、其所謂、病症に影響を及す地理學上の事實、果して如何なる意味性質を有するものなるかに就て一言せんと欲す、先づ二三の實例を引いて説明を助けん。往年英國のシヨアー、デッチ、獨逸のミュンヘン、及伊國の羅馬府に於ては、傳染病の流行甚だ猛烈を極めたりとも、近年に至て大に土地改良の實を擧げて以來、殆んど全く無病の健康地となれり、

是れ即ち土壤の性質は、大に病症に影響を及ぼすてふ事實を證するものにあらずや。又本年我が國に於て最も盛に赤痢病の蔓延せる地方は、神奈川、静岡、群馬、山梨、愛知の諸縣なるは誰れも知る所にして、是が理由を解く者あり、曰く、是等の地方は富士山系の余脉に属し、川流互に相通じ、病毒の傳播を助くるが故ならんと、果えて然らば、山川の方向は亦大に病症に影響を及すものなるを知る、次に米國フロリダ半嶋に於ては、年々黃熱病其威をたくまじうす、而えて是が解をなす者あり、曰く抑此地方は、其南方に有名なる病源因キューバ嶋をひかへたるが故に病毒は南風に乘じて半嶋に達するが故ならんと、果えて然らば風向も亦病症に關係を有すると大なるを知るべし、次に亞弗利加北岸のトリポリスに於ては、時々、黒死病の盛行を來すとあり、蓋し此地は土耳其人の呼んで、蠅王國と稱する處にまて、蠅群雲の如く從て病毒の散布甚だ速なるによると、然らば動物特に昆虫の如きは、大に病症に關係を有するものなるを知る。又獨逸國にありては、三十年以前、一の癩病患者を見ざりしが、近年に至り、切りに同國の北方メニメル地方に、同病の蔓延を來すに至れり。學者の言に由れば、是れ此地は、コーノ、クールランド（共に露國）等の癩病地に接し、近年兩國間の往來交通甚だ繁きが故に、不識不知の間に蔓延の度を進めしものなりと、已に然らば、往來交通は大に病症に影響を及ぼすと同時に、海岸線の長短、交路の便不便も亦少からざる關係を有すると明かなり。

以上は説明の簡畧ならんとを欲して、専ら傳染病に關する方面のみを述べたれども、非傳染病に於ても適當なる實例にとほしからず。即ち我が奥羽及北越等の如く、寒威凜烈なる地方に於ては、腦及神經系諸病の患者甚だ多く、又南方の琉球特に沖繩嶋に於ては齒痛、患者、胃腸病患者甚だ多く、

伊豆、總房半嶋等にありては眼病患者甚だ多き等は、大に地理學上の理由あるものにして、是が解釋を爲す者の言に由れば、北國地方及甲信山陰道等に於ては、寒氣劇烈なるを以て、冬間は巨燧入り甚だ流行し、爲めに逆上を來し、遂に腦病其他神經系諸病に對する素因を増長するに由るものなるべく、又沖繩嶋に齒痛患者、胃腸病患者多きは、此地方の習慣として平常砂糖を多食し、其他不消化物を妄食するに歸因するものなる可く、伊豆、總房地方に、眼病患者多きは、頗る漁業に關係あるものにして、元來海水と眼病とが密接の關係を有するとは、先年三陸地方大海瀰の後、眼病患者の續出したるに由て明らかなり、これに由てこれを觀れば、氣候の如き民俗習慣の如き、職業の如き亦大に、病症に影響を及ぼすや、疑を入れざるなり。

以上は極めて簡單なる實例に就て一言したるのみ。其他地理學上の事實にして、病症との關係密接なるものは尙甚だ多かる可きも、一々是等を列舉せむは、本論の目的にあらざるを以て、不十分ながら右の諸例を以て満足す可し。但し病症に影響を及し是と關係を有する地理學上の事實とは果して如何なる種類のものなるかに就ては讀者、略、其概念を得たるならん。

已に論ずる所に因て觀れば、此學の範圍たる、殆んど純粹地理學の範圍と同じく、甚だ廣漠たるものにして、殊更現今の如く、其進歩尙頗る幼稚なる時代にありては、是が統一的研究の難事なるは疑もなし。然りと雖、至難は必ずしも不能を意味せず。況んや今日内外の學者にして、例令全然病理地學の名に由てこそせざれば、衛生事業の爲め、或は殖民事業の爲め、類似の研究をなす者甚だ多きに於てをや、斯學の大成、何ぞ必ずしも、不能なりと云ふを得んや。

思ふに如何なる學科と雖、多少他の學科と相交渉するものにして、特に病理地學の如く其範圍の廣

大なるものにありては、是が研究上、大に關係學科の素養なかる可らず。即ち病理學並に普通地理學は云ふ迄でもなく、其他地質學の如き、氣象學の如き、細菌學の如き、生物學の如き、或は統計學の如き人類學の如きは共に補助學科として重要なものなり。加之、凡て學術の研究は順序を尊ぶ、研究の順序にして整然たらずんば、何の日にか統一的知識を得べけんや、然らば病理地學の如きも、一定の研究法なかる可らず。されど、余の寡聞、淺學なる、世の學者が、果てて如何なる研究法を採用せるかを知らず。只本論に於ては、假りに次の順序に従ひ、簡單なる説明をなさんと欲す。

●●●●●
理論病理地學

△△△△△
氣候病學
△△△△△
地方病學

●●●●●
記述病理地學

△△△△△
日本病理地誌
△△△△△
世界病理地誌

●●●●●
應用病理地學

△△△△△
移民衛生論
△△△△△
轉地療養論
△△△△△
旅行衛生論
(歐米の所謂、殖民衛生論)

先づ第一の理論病理地學にありては、重に病理地學の原理を研究す。而して、便利上是を氣候病學、地方病學の二部に分ちたるも、元來兩者間に判然たる區別を立つると難し。氣候病學は氣候と病症、特に其氣候に於て發生する、傳染病との關係及び、其性質を研究する學にして、一定の氣候には多少一定の病症を發するは、實驗上並に統計上、疑ふ可らざる事實なるが如し。即ち我が日本に於て

は天然痘、流行性寒胃は重に冬春の頃に盛行し、赤痢、コレラは大抵夏秋の候に蔓延するが如き、或は雁瘡の秋末に發し。脚氣の重に梅雨後に起るが如き、皆實驗上の事實にまて。又十分病理地學上の理由あるや明かなり。而して其理由を探究するは、氣候病學の専務なり。

次に地方病學に於ては、風土と、其風土に固有なる病症との關係を研究す、故に又風土病學の名あり。此學は病理地學中最も困難複雑なると、同時に最も有益に最も興味ある部分に属す。蓋し病症の大半は世界共通なりと雖、其間また著しく地方性のものあり、特に傳染病に於て然りとす。即ちメキシコ灣地方に於ける**實熱病**の如きは此適例なり、其他我が奥羽地方の**首下り病**、北越の**洪水熱**、九州特に熊本縣の**疫痢**、八重山群嶋の**ベスト病**。印度の**コレラ**、ニウ、ギニヤ地方の**マラリヤ**等は皆地方病の適例にまて、特に我が日本の脚氣及癩病は、未來の醫學者が大に研究す可きものなり。加之元來同類の病症にして、風土民俗の異なる爲め、著しく其經過に差違を來し、一見、人をまて異種の病症にあらずやとの疑ひを起さまむるとあり、例令ば同じ脚氣にまて**ブラッル**に於ては、日本に於けるよりも、甚だ重く、同じ**マラリヤ**も**亞弗利加**にありては**黑水病**の名を得て最も激烈に。同じ**ヤブテリー**にして高緯度地方のは、却て低緯度地方のより、猛烈なるが如きは是れなり。然らば地方病性を有するは殆んど全く、傳染病のみなるか。余の淺學なる尙十分の研究を爲さずと雖、鑛山地方に**ヨロケ病**(俗名なり)を發せ、又精神病の一種にまて深山幽谷中にのみ發生するものある等の事實に由て考ふれば、風土の如何、衣食住の如何、職業の如何等に由り非傳染病にも必ずや地方的傾向を由來するならんと信す。

これに由て、これを觀れば一地方の風土民俗と其地方の病症とは密接の關係あるものにまて、此等

の關係を地質學、細菌學、病理學、人文學等の知識に由て、精査探究するは、甚だ興味あることに屬す、是れ地方病學の事務なり。而して已に一言せたる如く、地方病學及び氣候病學は病理地學中の理論部に屬するが故に、専門家には必要に於て興味多きも普通讀者の要求を満足せしめざる恐れあり。是れ即ち記述病理地學の必要なる所以にして、此編に於ては、内外の病症を地誌的に記述せ。恰も普通の地理書を讀むが如く、中外各地の風土病、傳染病、及著き病症を知らしむるを目的とす。但し本論に於ては、繁雜に流る恐れあれば、是を記せず。

次に應用病理地學に至ては、専ら病理地學の原理を活用して、實利的に社會を益せんとするものなれば、應用の方面必ずしも移民衛生、轉地療養、旅行衛生の三種に限られたるにあらず、寧ろ一の適例として挙げたるのみ。近來移民衛生の事大に内外人士の注意を引くに至れり蓋し移民事業の成功、不成功は殆んど全く、移民衛生の完全なる否とに因るは、從來の經驗、の證する所、最近の學理が斷定する所なり。苟も移民衛生にして其當を得んか、不可住地も可住地となす可く、猛惡なる天地も樂園と化す可き。而して其完全を得んと欲せば第一に移民の體質を研究す可き、即ち該體質は、如何なる風土に於て最も容易に馴致の効を奏するか、如何なる勞働に従事して最も多く効果をおさむるか、等にして、次には移住地の良否を精査討究し、其風土病は如何、民俗習慣は如何、而して移民の體質に、如何なる病理的影響を及ぼすか等の諸問題を研究し、然る後初めて、移民衛生の完全を期す可きなり、然りと雖、移民事業は議論にあらずして、實際なれば、移民衛生論を爲す者は宜しく經驗に富み、學理の蘊奥を極めたる人ならざる可らず。然らずんば、移民衛生の名あつて實なきに至らん。

第二の轉地療養論に至つて、病理地學は、著しく治療醫學と交渉するに至る、蓋し轉地療養の、病症の治療に大効を奏するは、已に醫學社會の一般に認むる所に於て、肺結核の如き、皮膚病の如き、是を除いて殆んど他に療法なきが如し。而して轉地療養中には氣候療養、礦泉療養、精神療養等の別ありて、或は青山の懷に息ひて、靜肅たる自然に交り、或は海波洋々たる邊に清淨なる空氣を呼吸し、或は礦泉に浴して四圍の千山萬岳を眺むるに至らば、如何なるヒステリヤ患者にありても、多少の快樂を感ぜざらんや。

然り、轉地療養の有効なるは、已に疑ふ可らずと雖、實際上、尙十分の効を奏せざるは、亦經驗家の説く所なり。是れ他なし、從來我が日本に於ては、保養地に對する學理的研究甚だ不十分なりしが故にして、通常某所の礦泉は何病に効あり、某所の氣候は何病に適すと稱するも、是れ所謂俗言に於て、必ずしも學理上の根據あるにあらず、故に將來に於て、益々轉地療養の効を十分ならせめんと欲せば、地質學、氣象學等の知識に訴へて、大に保養地に對する病理地學的研究なかる可らず。然らば轉地療養論は自ら應用病理學中の一部をなすこと明なり。

更に眼を轉じて、熟々現今世界の大勢を觀察するに、東西各國孤立の時代は、已に業に過ぎ去りて、相互間往來交通の繁さ、また決して昔日の比にあらずとす、況んや對等條約を完結せ、内地雜居を公許せたる今後の日本に於てをや、内國人の外遊する者、異國人の來航する者、參叉交錯えて、其繁雜、到底今日を以て、度る可らざるものあらん。果して然らば我が國民亦決して、從來の如く、東洋の樂園嶋にのみ、屏居すること能はざる可く、風土、習慣民俗の異なる歐米各國は更なり、或は風冰る北海の濱、炎熱金を熔かす沙漠の地、或は蠻烟暗き大陸の奥、瘴氣立てむる南洋の嶋、或は

猛獸の叫ぶ處、毒蛇害虫の襲ふ邊、亦日本人種の鉄脚旅行を試むるの地たらずばあらず。已に然らば、從來世人が一般に無頓着なりとに關せず旅行衛生の必要を感ず可く、從て是が學理的研究の動機を見るに至らん。而して此種の研究は應用病理地學中の一部に屬す可きは寧ろ理の順當なるものといはざる可からず。

尙、病理地學の研究が、衛生事業の發達進歩に大影響を及すは、明かなる事實にして、衛生事業の成効すると否とは、全く病理地學的根據の十分なると、否とに由ることは、先年ダブリン府に於ける下水工事に徴えて判然たり。是より先、ダブリン府に於ては、腸熱非常に流行せたりと云が、人皆其病源を下水に歸し下水工事に因て、是を防壓せんとせしも。然れども目的を達すること能はざりき。これ蓋し病源は下水にあらずとて、寧ろ土壤にありしを以てなり。かくの如き失敗は、病理地學的根據の薄弱なりと起因するものなれば、吾人はあくまでも斯學の研究に向つて、十二分の効果あがらん事を、熱望せざるを得ず。

以上吾人は病理地學に就て、其一斑を述べたり。尙論す可きと多しと雖、徒に貴重紙面を穢さんとを恐れて、此所に本論を結ばんとす。但し余の淺學なる引證等に於て、多少の誤りあらん。諸賢の教訓を待つ。